

# 動乱期の思想形成

—モアとホーブズの登場—

小野修

古代遺跡の発掘現場の近くにテントが張つてあり、その中に楔形文字が刻みこまれた円筒印章を解読する作業をしている高齢の考古学者の姿があつた。退職後も解読作業を続けてきたという老教授に、「羨ましいですね、昔ののどかな時代が読みとれる方は」と言うと微笑が応えた。

「そう思ひますか。この箱にぎっしり入つた円筒印章(シリンダー)のほとんどすべてが裁判の訴状や紛争の記録です。今、私が手にもつているものも隣の土地の所有者が自分の土地を占拠しているので何とかして欲しいと訴えています。昔も今同様もめ事が絶えなかつたのですよ」——紛争や戦争のことを考へるとき私はいつもこのときのことを憶い出す。ボガスカレやヤズルカヤなど当時訪れた遺跡の様子などはもうすっかり忘れてしまつてゐるのに。

## 一 マキャヴエリの遺訓

古代史を彩る東西の様々の聖典や名著の類の殆んどが戦いやもめごとに満ちていて、人間同士のいさかいや怨恨の

小さな火種が、家族から部族間の反目になり、やがて地域から国を挙げての決戦に至る様子を読むことができる。大規模の凶作がもたらした飢餓が原因で民族の移動が行われ、戦争や抑圧の原因をつくり出した場合も少なくない。他方、征服や交易の結果、数世紀の繁栄を誇ったあと戦争によって急速に衰微したり、地震や噴火などの自然災害によつて突如滅びたりする文明もあつた。

このような古代文明の遺跡がエフェソスやジエラシュ、ペトラなど大規模なかたちでそのまま残されているところもあるが、アテネやローマのように破壊された城砦都市の上に後世都市が建設されたところもある。様々な意味でこれらの中古文明の栄えた多くの地域に共通していることは文明の終焉が戦争もしくは自然災害によつて区切られており、いわば生命体としての社会組織が戦争あるいは地震などによつてその自然の活力を消耗し尽くしたことが歴然としている点である。消滅した文明の中心地の多くがそれをとりかこむ森林や緑地の消失が終焉のはじまりだったことを示している。新旧の聖書物語の舞台となつてゐるヨルダンは現在国土の殆んどが砂漠化しているが、かつては森と湖のある豊かな土地であった。古代における戦争の度に何千何万艘という軍船の資材としてレバノン杉の巨木は伐採され、中東から地中海周辺にわたる鬱蒼たる森林もまた永久に失われてしまつた。

戦争や自然災害で都市が破壊されたあとは人口重心は移動して、また新たな地域の破壊の範囲をひろげることになるのだが、砂漠化の事態は今日の方が深刻だとも言える。約二百年前からはじまつた産業革命、都市化、人口爆発、大量消費、環境汚染という悪循環が地球全体に砂漠化をすすめ、その速度は対応策をはるかに越えている。その主たる原因是、その対応措置が最も必要とされる地域での対策に遅れが著しいためである。砂漠化による貴重な文明の消

失などを繰り返してはならない歴史の教訓として国際社会は予算と人員を対応措置に投入する必要がある。一旦破壊された自然環境の修復には予防策とは比較にならない経費と長い年月を必要とするからである。<sup>(1)</sup>

古代人の知恵から学ぶという点において、イタリア文芸復興期のマキャヴェリ（一四六九—一五一九）が創造的な模倣の勧めを行ったことは知られているが、その本質は戦争と環境破壊を繰り返した古代人の失敗から学ぶことを強調した点である。キリスト教教会の堕落ぶりに失望したマキャヴェリは、統治の新しいモデルとして古代ローマの民主制を再検討した。ルネサンス人に顕著にあらわれた力への信念は、彼の場合、指導者の個人的な力量（フォルツア）と雅量（ヴィルテュ）に期待をかけた。これはキリスト教における伝統的な徳目の実践を指導者個人に敢て求めまいとする宣言であった。マキャヴェリの思想の豊かな発想の中でも、『ディスコルシ』の第二巻五章に見られるキリスト教の勃興期における破壊行為に関する論及は興味を唆る。

彼によるとキリスト教徒はその教義の支配と定着をすすめるためにユダヤ教徒を含む異教徒の伝統的な信仰組織と伝統的文献を徹底して破壊し、ラテン語のみを支配地域に強制し、キリスト教の精神的遺産がこの言語によってのみ記録される様に制度化したと述べている。<sup>(2)</sup>

マキャヴェリの論及は歴史の古今東西の文化革命や宗教弾圧にかんする多くの実例を裏書きするばかりか、二〇世紀に入つてのファシズムから原理主義にいたる専制国家の指導する狂信的行動の原型に触れるものもある。たしかに『君主論』は多くの政治家に靈感を与えてきた。自分を君主の立場に凝ることによって行動のための意志と指針

の吟味が促される。しかし、マキャヴェリは必ずしもあるべき体制を明示していないので読者である政治家はこのロレンツォ大公への建白書を読んで、指導上の決断は神の名ではなく自分の責任で下さなければならないという心得を教えられるのである。

マキャヴェリ本人は、こうした著作に先立つ二〇代の後半、ようやく世相を読む力もつきはじめた頃、フイレンツエを吹きあれた文化大革命ともいえる狂氣の世界を見た。即ち、メジチ家の追放後、修道士サヴォナローラ（「武器なき予言者」）の五ヶ年にわたる人民民主主義的支配とそのあとの大失脚、捕えられて政府前広場で焚殺される迄を見た。マキャヴェリはその直後政府に書記官として入局し軍事委員会の書記となつた。傭兵隊に依存した当時の戦争は、激烈に見えて実は死傷者殆んどなしといった事も起り得た。レオナルドの描いたアンギアリの戦いも実際は戦争映画のロケーションの趣きがあつた。

マキャヴェリの入局早々の事件のひとつがフイレンツエの傭兵隊長パウロ・ヴィットーリの指揮したピサの攻撃の際に起つた。城壁を崩して市内に突入する直前、市内の陣地の強化に気付いたヴィットーリは突入を一旦中止、報酬の値上げを求めた。ヴィットーリは裏切り行為を行つたとしてフイレンツエ側に処刑されたが、このことを契機にマキャヴェリは国民軍の創設の必要を痛感するようになつた。

国民軍の創設はマキャヴェリの夢であつたから小規模部隊を暫定的に編成して教練などをさせていたが、外交交渉が決裂し、侵入を開始した敵軍の太鼓の音が轟くや否や新編成の国民の兵士は蜘蛛の子を散らす様に逃亡してしまつたという経験もある。当時のイタリアは小国に分裂しており、マキャヴェリの念願したイタリア統一はまだ遠い先の

ことであつた。一五二七年、ローマはドイツのプロテスタントとスペインのカトリックとの連合軍の手に陥ち徹底した掠奪と破壊が行われた。ルターが宗教改革の火の手を挙げてわずか十年後のこの年、ルネサンスのイタリアは滅びた。フィレンツェのメジチ家は追放され、仕官の望みを断たれたマキャヴエリも戦地に赴く旅の途中持病の胃病が急変して死亡した。<sup>(3)</sup>

ローマの掠奪のあつた年、一五二七年を転機に古い体制は死に、新しい対立の構図が徐々にかたちづくられて行つた。カルロス十世（カール五世）の支配下のローマではプラトンの『国家』について講義することが禁止されたという。<sup>(4)</sup> プラトンは当時のすべての人文主義者<sup>(ユマニスト)</sup>にとって魂の師であり、ユマニズムは中世の封建的社會秩序にとって最大の思想的脅威であった。しかし、プロテスタンティズムの勃興が新しい經濟社會の登場によつて促がされたように、ユマニズムはこの新しい經濟社會がもたらした世界的な視野の拡りによつて力をつけてきており、カトリシズムの体制は經濟、政治、思想の三方面からの挑戦をうけることになる。

## 二 新しい体制の構想

マキャヴエリが『君主論』（一五一四年）を公刊した三年後、ドイツではルターに導かれた宗教改革がはじまつており、英國では即位して間もないヘンリー八世がルターが反ローマの烽火をあげたことに関心を示していた。彼もローマ教皇の支配の時代が終ろうとしていることと、英國が歐州大陸から政治的にも經濟的にも独立すべき時期が来ていることに気付きはじめていた。

一五一六年に公刊された一冊の重要な書物が英國という島国の未來のあるべき体制を巧みに暗示した。作者はトマス・モア（一四八七—一五三五年）、一八歳で即位後まだ間もなく、若々しく英明であつたヘンリー八世を囲む若干の顧問の一人であつた。モアは二六歳からロンドン市会の議員のほか、ロンドン市の助役も勤め、ロンドンの商工界を代表する法律家であつた。彼は博学な人文主義の研究者としても知られ、深い神学的知識を分ち合う間柄を通じて、当時の聖書学者として国際的に名声の高かつたロッテルダムのエラスムス（一四六六—一五三六）とも家族ぐるみの交際をしていた。エラスムスはヘンリー八世とは王子の時代に知り合いであつたし、後に神聖ローマ帝国のカール五世の顧問官として、皇帝とヘンリー八世との会談にも随行している。エラスムスは当時のカトリック神学者の中では最も自由で柔軟な立場をとっていたから、ローマ・カトリックの中では最もプロテスタンント改革にたいする調停者にふさわしい人物であった。

エラスムスはオックスフォード大学を訪れた三三歳の年、モアと知り合って以来、互いに尊敬し合う親友となつた。モアが積極的に社会で活動するタイプの人文主義者とすれば、エラスムスは正反対の隠遁型の人間で、私生児であつたことから屈折した心の持主だった。モアよりひとまわり年上で古典古代に関し抜群の知識を持つてヨーロッパでも有名な古典学の研究者であった。

エラスムスは一五一一年にパリで出版した『痴愚神礼讃』で名声を得たが、歐州共同体思想の先駆的著作と言われる『平和の訴え』（一五一七年）によつても知られている。『痴愚神礼讃』はその諷刺性においてフランソワ・ラブレーの『ガルガンチュア物語』（一五三四年）に並ぶが物語というよりは政治的で神学的な隨想である。この作品が

ロンドンのトマス・モアに捧げられているのはモア家に逗留中に執筆された為である。この分野を専門としていない者にとつても読んで興味をひかれる書物であるが、警句やあてこすり、皮肉、嘲笑などに満ちた饒舌が続き辛苦の作品と映るが、終始一貫して単に愚昧さの諸相を称揚して已まない様に見えながら、実はたつたひとつのことと主張している様に見える。つまり狂気こそが幸福の源泉であって、我を忘れる程の狂気こそが愚行フオーリの真骨頂であるとして精神性を強調した内容の為、読み様によつてはかなり危険な書物だということができる。つまりここでは現状の否定、実存へのかたくなな懷疑、既成の宗教的慣習や儀式への不信、感覚的正常性を蔑視し、狂乱や錯乱を幸福の源泉とする結果、最後の部分では敬虔な人々も、「永久に狂人となつていることを夢見る」と愚行への道を賞揚して見せてくる。エラスムスもモアと同じくプラトンのイデア論の深い影響下にあって、プラトンの中期傑作『國家』ポリティアの有名は洞窟の比喩を次のように狂氣と結びつけてみせる。

私はここでプラトンの寓話、つまり、洞窟に繋がれたまま、そこから物の影しか見られないという囚人の話を思い出しますね。そのなかで一人が逃亡した後に、また洞穴へ戻つてきまして、皆に向い、現実の物を見てきた旨を物語り、情ない影形以外には何も存在しないなどと一同が信じこんでいるのは、實に重大な誤謬だということを証明してやるのです。その男は、賢くなつた為に、仲間の者として憐れと思い、痴愚の結果このよだな迷妄に陥つたままでいることを慨くのです。しかし、一同は一同で、この男の狂亂を嘲笑して、追い払つてしまふのですよ。普通の人間同士の間でも、これと同じことが行われます。<sup>(5)</sup>

ここではそれぞれ反対の立場にあるものが自分こそが正しい觀点を抱いているという迷妄のもとにあるという比喩

として用いられており、プラトンの意味するイデアとは異なる内容を暗示している。それはまさに新しい時代が町角まで近づいていることを予見するものであった。エラスムスが痴愚神に「狂気こそが幸福の源泉であり、肉体にたいする精神の優位を示している」と語らせるとき、ローマ教会は免罪符を大量販売しており、ルターは程なく献金よりも信仰の大切さを訴えて宗教改革の烽火を上げたのであった。

モアはヘンリー七世の時代、徵税の行きすぎを議場で批判し、王の不興を買つていたので、一五〇九年ヘンリー八世が即位したときは多少とも改善がされることを期待した。ところが治世一年目にして王が銀貨の改悪を行つたり、教皇ユリウスの指導下の「神聖連合」に組してフランスとの戦争に加わり軍事費を増大させたり、各地に宮殿を建設して国費を濫費する一方で苛酷な税制を実施するに及び大いに落胆した。こういう治世にたいする批判をこめて『ユートピア』（一五一六年）が書かれたのであるが、モア自身もロンドン市の評議員として治世のインサイダーであつた事情からこの作品は複雑な構成に仕上げられている。体制批判の咎が自分自身にふりかかるないようにする為、第一部の虚構を第一部で裏書きし、何重もの箱書きの中から文書をとり出す工夫がこめられている。しかも一部の素養のある人々のみを読者とする為にラテン語（つまり中世の国際語）で書かれたことがかえって国の内外の注目を惹き、モアを政治の指導的理念の持主として全面に押し出すことになった。空想上の国家を論じたモアがこのようにしてロンドンの民衆の信望を担つて現実の政治に深くかかわりをもつようになると当然国王からの信頼も増大することとなり、臣下としては最高の地位であつた大法官の職に就くまでになるが、自分の宗教上の信念と王の政治上の意欲とが喰い違い、遂には運命的な対決を招きよせることになる。このことは皮肉にも自著の『ユートピア』の中で予見

されていたのではないか。その『ユートピア』の第一部で語り手として登場する大航海者ラファエル・ヒスロデにたいしモアは次のように語りかけている。

「あなたのような聰明さと、高邁な精神をおもちのかたこそ、社会全体の幸福のために知恵と力をささげてくださるのが当然ではないでしょうか。あなたが王の顧問になつて、王をはげまして、善良、高潔な行為をさせていくのがいちばん能率的だと思います」<sup>(6)</sup>

この問いはプラトンの「王が哲学者でなくてはならない」という思想的伝統を想起させるものである。ところがヒスロデウスはこの提案を丁重にことわっている。「たいていの居候は平和の事業よりも戦争をよろこんでいますが、私は戦争については何も知りませんし、知りたくもありませんから」と一笑に付したあと、「彼ら（王侯は）自分たちの領地を立派におさめることよりも、新領土を合法的であれ非合法的であれ拡張しようと熱中しているのです」と言う。この言葉は四、五百年を経た今日の私たちがいまだに続いている愚行を笑うかのように響く。「王の側臣たちにしても王の寵臣以外は誰の話にも耳を傾ける気のない連中だから、その連中に提言してみてもはじまらないですよ」——このヒスロデウスの立場は即位直後のヘンリー八世に失望した当時のモアの心情をよくあらわしており、本気でそう思っていたとも考えられる。その後が王に積極的に仕官する気になるのは数年後王との合作でルターへの弁駁書を準備はじめたときであろう。そのときの動機はプロテスタントが勢いづいた時代に抗してカトリック教会への護教的熱意が昂じた為と考えられる。

王に仕えるのは哲学者の任務であるし、自分の義務である、とプラトンを想起しながらモアが繰り返し考えたこと

は否定できない。「法学者が王になるか、王が哲学者になるかしたときにのみ、人民は幸福を享受できるものだ、と  
プラトンはいったではありませんか。王に献策し、王を啓蒙する仕事を哲学者の品位をおとすものと考えたりされま  
すと、われわれは幸福になりようがないではありませんか」——モアが作中人物のヒスロデウスに言うこの言葉は実  
は自分自身に言う言葉であり、それはのちにまでひびく木霊となり、やがて王自身の口から自分の顧問となるように、  
使節となるように、遂には王の治世を担つて立つ大法官となるように要請する言葉となつて伝えられたのであつた。

『ユートピア』の国制を紹介することは本稿の性質を越えるが、一言つけ加えるならば、その著者であるモア自身  
が第一部でヒスロデウスなる航海者の描く何処にあるやも知れぬ国 UTOPIA を至福の国 EUTOPIA とは信じてい  
なかつただろうという問題は残る。第一部の終りの部分に読み進むうちに多くの読者はこの国の持つ個人的自由の全  
くない息苦しいまでの集団主義的な雰囲気に辟易させられるのではないかと思う。人民が幼児の頃から辛苦するよう  
に神学者たちに導かれて行くミトラの神はインドの神であつてモアの信ずるキリスト教の神ではない。この共同社会  
は寛容さを欠いてどこかしら新興宗教教団じみたところがある。小説のかたちをとつた政治文書として克明に読  
めば面白いという点では一〇世紀中葉に刊行されたジョージ・オーウエルの未来小説『一九八四年』（一九五一年）  
と共通した要素をもつてゐる。

ヘンリー八世もやがてローマ教会と対立するようになる。王妃キャサリンはスペインのアラゴンの王女であつたが  
嫂であり、兄の死後ヘンリー八世と再婚したが、王女メアリーを儲けただけで世継の男子がなかつた。そのことに不

満を感じていた頃、狩猟に出た先で寵臣の娘アン・ブリンに出遭つて心を惹かれた。アンの身籠つた子供を承認する為にアンと結婚せねばならなかつたが、キャサリンとの離婚を成立させることが必要であつた。ヘンリーはローマ教皇のクレメント七世に嫂との結婚が聖書の教えに反しており成立していなかつたことを確認して願い出た。当時教皇は神聖ローマ帝国によつてローマが掠奪され、皇帝カルロス五世のもとで囚われの身であつた。皇帝はキャサリンの甥であつたのでその機嫌を損ねることをおそれた教皇は大法官でヨークの大司教でもあつたウルジーにロンドンでまず協議を行い、その結果をローマに知らせるように命じた。しかし、ウルジーがその処置を怠つたためヘンリー八世はウルジーを罷免し、一五二九年トマス・モアを大法官に任命した。ヘンリーはローマ教皇への離婚申し立てが拒絶されると英國議会を通じてローマとの関係を断絶する制度を次々に立法化し、アンとの結婚の正当化も繼承法制度で承認された。更に一五三〇年には首長令を制定し、英國教会を完全にローマの支配から分離独立させた。ヘンリー八世は思想的にはカトリシズムを放棄する積極的な姿勢を示さなかつたが、その政治的決定——繼承法と首長令——につとも賛同しなかつたトマス・モアはロンドン塔において反逆罪により処刑された。

トマス・モアがヘンリーエ世を補佐してルターを弁駁し、権力の階段をのぼりつめたあと、王のヘンリーによつて反逆罪で処刑されるという狂氣の世界を誰が予期し得たであろうか。トマス・モアの優れた伝記を書いたカウツキーがマルクス主義学説にたいして批判的な立場をとり、正統派からはベルンシュタインと共に修正主義者として厳しく断罪され、めでたくもレーニンから『背教者カウツキー』と烙印を押されている。カウツキーが正統派を批判するようになつたのがモアの『ユートピア』を研究したからであるとすればモアに啓発された為だつたと言える。カウツ

キーは『ユートピア』の第二部に描かれた集産主義的な共産主義社会が好きになれなかつたのだが、彼は来るべきソヴィエト共産主義の社会がまさにそれに近い抑圧型の非人間的社會をソ連、東欧においてつくり出すことを予見したかのようであつた。ソ連東欧が崩壊したことを知つていてこの著作を読むことのできる我々はソ連東欧の空虚な政治宣伝に惑わされずにモアの空想画を味う幸運に恵まれていると言えるだろう。

### 三 変革期の到来

トマス・モアが処刑された翌三六年、親友を失つて憔悴していたエラスムスが死亡、彼らとともに消え去つたのは自由で寛大なカトリシズムの思想であつた。華麗だが弱体であつたローマの大本山がプロテスタントの軍勢に蹂躪された一五二七年のサッコ・デ・ローマのあと、ローマ教会の危機に目覚めたイグナチウス・ロヨラの指導のもとでイエズス会（一五四〇年認可）が急激に抬頭し、信仰心の刷新に加えて組織上の補強を行つたローマ教会が復活しプロテスタンント勢力の拡大に対峙するようになつた。

トマス・モアやエラスムスの助力によつてルターにたいする批判文書を公刊し、一五一一年ローマ教皇から<sup>ディフェン・ファイ</sup>護教勲士の位階を受けられたヘンリー八世も、歐州のドイツ・スペイン連合勢力とフランスの対立の渦から離脱を図り、十年後にはローマ教会の支配から独立した国家体制を実現させた。

ヘンリー八世の死後のチャーチー王朝においては、狂信的なカトリックであつたメアリ一世（「ブラッディ・メアリ」）によるカトリシズム復活にかけた執念と挫折の治世を除けば国民の多くは英國教会を支持した。これはエリザ

ベス女王の時代に特徴的に見られるように民族的な感情がスペインの無敵艦隊の来寇などによつて刺戟されて結果を促した為であるとともに、英國教会の教義が従来のカトリシズムを恩存して既存の保守層をとり込んでおり、長老派など新しい宗派の力も限られていて弾圧を受けることが少なかつた為である。エリザベスの時代の國民の大多数は冒険商人たちに導かれた海外貿易に伴う富や知識の流入を喜び、社會資本の蓄積という豊かさの指標が他国を凌ぐ勢いで伸びてゆくことを実感していた。しかも勤労こそが幸運の源泉という信念は、スペインの来寇を打破したあと、とくに新しい経済社会を担う商工階層の人々に自信を与え、都市や港湾には活気が満ちた。

一六〇三年（トマス・ホップズが一八歳でオックスフォード大学に入学した年）エリザベス女王が死去、スコットランドのスチュワート家のジェイムズ六世が即位、ジェイムズ一世となつた。ジェイムズは當時スコットランド国民の間に拡りつつあつた長老派<sup>プレスピテリアニズム</sup>信仰が人間相互の平等意識が強く王を軽視する傾向をもつてゐることに戸惑いと反撥を示していた。ジェイムズは學識の持主であつたこともあるつて、王權神授説を執筆して刊行、自分が神にたいしてのみ責任を担う旨を明白にした。英国内の長老派やピューリタンが英國教会の牧師をへらして自分たちの牧師を教区にあってがう様にしきりに請願してきたことに一応の警戒心を抱いたが、ジェイムズが脅威を感じたのはむしろ復権を目論むカトリックの過激派であつた。ガイ・フォークスによる上院爆破未遂のあと約六千人のカトリックを処罰して断固たる態度を示した。

ジェイムズは武士や武人を好み三〇年戦争への参戦も拒否した。しかし、北アイルランドで土着の豪族が国外へ逃亡したあとを没収して徹底して英國型の土地利用による植民を行つ一方、アメリカにも植民地の開発（ジェイムズ

ズ・タウンなど）を行つた。文化面では英語による欽定訳聖書を刊行するなどして、ピューリタンの国教会批判の姿勢にたいし国民意識を築く対抗措置をとつた。その為、治世の間にピューリタンは遂にメイフラワー号によつて新大陸を目指すようになつたのだが、同時期にアイルランドにたいする植民策も精力的に推進した。このような多彩な国家的事業を行つた間ジエイムズが国会を開いたのは一六〇四、一四、二一、二十四年の四回のみであつた。当時の慣習としては国会を十年に一回しか開かないということは好ましくないことであつたにせよ、少なくとも異常なことではなく、そのために民衆の反撥を招くこともなかつた。

こうした父親の治世を受け継いだチャールズ一世に議会軽視の感覚が見られたとしても不思議ではない。チャールズは妃アンリエッタ・マリアの実家ブルボン家の威光と華麗さに羨望を禁じ得なかつた様子も伺いうる。しかし、戦火をまぬがれていた英國は資本蓄積も進みフランスよりはるかに進んだ経済体制を築きつつあつた。確実に富裕化しつつあつた都市の商工階級が社会の実質的な生産の中核を握つており、伝統的な大土地所有者による農業社会にとつてかわりつつあつた。

こうして新しい中間層がロンドンを中心とした都市周辺部に土地を持つた紳士階級ジエントリーとして生じ議会内で発言権を強め旧来の封建的な体制の指導層と同教会や議会運営をめぐり衝突をくり返し、その圧力は無視できない迄になつた。そこにはピューリタンや長老派などに代表されるプロテスチントの信仰の自由の権利の要求が着実に出てくる。非国教徒が公務から排除されることはもとより、公然と宗教活動を行うことが禁じられるばかりか、国教会の為に税金を納めさせられる為、「神のもとの平等」の観念をプロテスチントの信仰を通じて得たものにとつて、王権が武力を

もつて押しつけてきた不平等社会の慣例は絶えざる憤懣の種であり、打破すべき制度となっていた。

他方、国王チャールズにとつて歳入を図ることが国防の鍵であった。一六一五年、彼は即位すると早速スペインとの戦争準備をはじめる。戦費は国会で承認を受けねばならなかつたが、国会はトン税、pond税は一年に限り認可し、終身の課税を得られなかつたチャールズは拒否、スペインと開戦するとスペイン戦にそなえて用意した軍艦でフランスの新教徒<sup>ユグノー</sup>を攻撃するなど英国内の反感を買つていたが、スペインの軍港カジズへ遠征した英國艦隊が大敗して王は窮地に陥り止むなく第一回目の国会を召集した。しかし、失った海上兵力を補填する戦費を国会が拒否すると、王はやむなく、上納金（benevolence）を各界から要求して戦費徴達に走りまわる」となり、大いなる反撥をうけた。その挙句、次の年に私怨をもとにフランスとの開戦を宣言したときには臣下のバッキンガム提督はこれをこばんだ。一六二八年に第三回の国会を開会したとき臣下の憤慢が爆発し、「権利の請願」Petition of Rightとこうかたちで提出された議案を王に承認させることになった。

英國の王は過去において対立勢力であるローマ教会や貴族と幾度となく衝突した。ブリテン島とフランスの大半を国土とした中世英國のヘンリー一世は貴族を手なづける統治能力と運の強さも手伝つてカンタベリ大司教（ベケット）殺しの罪を追わされる危機を脱したが、その四男、次地主ジョンの代において英國のフランスでの領土は殆んど失われた。ジョンはローマ教皇（イノケンティウス三世）と対立して破門され、ジョン王追放の役を命じられたフィリップに敗れてフランスの領土を失い、遂には直臣の領主<sup>バロン</sup>たちに強制され一二一五年、大憲章<sup>マグナ・カルタ</sup>に署名した。ラングトン大司教が起草したこの大憲章はそれに先立つ二百余年前にヘンリー一世（一一〇〇—一三五年）が領主、商人、な

らびに臣民にたいして保障した基本的自由の再確認であった。

一六二八年のこの年、チャールズ一世にたいする個人からの請願のかたちをとつたこの要請もまた、それに先立つ四百年前のマグナ・カルタ<sup>マグナ・カルタ</sup>以来認められてきた筈の基本的権利をあらためて想起し、国王チャールズ一世に確認させる意味で、「かの古来から認められてきた権利」という意味を込めて、大文字の单数で Right、即ち Petition of Right と名付けられたのであった。

その権利の内容は生命ならびに身体の自由、法の正当な手続きによらなければ個人の権利を侵害されない」とと、更にはこの請願の眼目として、王は税金・上納金・貸付・贈与などを国会制定法にもとづく一般的同意なしに授権状などを与えた者に強権的に取り立てをさせて、従わないものに刑罰を加えるようなどとを今後一切やめるよう請願したもののであった。

これは英國にはテューダー王朝の絶対王制の伝統が残っていると錯覚していたチャールズ一世にとつては議会の威力を見せつけられた大事件であったが、この父親ゆずりの王権神授説の信奉者はブルボン王朝のルイ十三世の妹アン・リエッタ・マリアを妃としており、自分がどれほど時代遅れであるかの自覚も希薄であった。その点ではスコットランドからロンドンに出て王位についた父ジェームズの心意気に比べると退歩的ですらあった。考えてみればルイ王朝のフランスが迎えようとしていた太陽王ルイ十四世の時代は、英國史に重ねて見ればヘンリー八世からエリザベス女王の時代で終っていたのであった。封建的農業社会はロンドンではもはや過去のものとなり、個人の権利意識をもつ

た商工階級に代表される新しい生産と流通の社会が現出し、都市部や港湾の繁栄ぶりを支えていた。チャールズはどうしてこのことに気付かなかつたのだろう。父ジェームズはスコットランドからロンドンに出て王位につくと矢継ぎ早やに企画を生み出して行つた。良否は別として、北アイルランドの植民地化からアメリカへの積極的移民策、文化的には欽定訳聖書の制定などのほか、ベイコンやシェイクスピアの活躍も見られた。

こうした点に比べればチャールズの姿勢は消極的で退嬰的ですらあつた。海軍の拡充が必要ならなぜ議会の積極的な協力を求めなかつたのか。当時の議員が苦慮の末に思いついた個人による請願のかたちで王の大権の暴挙をとめようとしているとき「歴史の警告ランプ」は点滅して急を知らせていた。チャールズはそれを強気で無視し、不似合いな暴君の役を演ずることになる。妃アンリエッタも自分たちが糾弾されかねない雰囲気がなぜ生じたか理解できずにいた。民衆の人気という潮が急激に引きつつあり、王宮がやがて来るべき高波につき崩される年になることなど予感できるにはチャールズは稚なすぎたのであつた。

「国王（チャールズ一世）は、なるべくあいまいな回答をしてその場逃れをしようとしたが、両院とも強硬な態度を維持したために、ついに屈服して、六月七日にこれを呑み、ここに「権利の請願」が成立したのである」<sup>(9)</sup>

チャールズ一世がこのときを契機に非協力的な態度を改めて議会との協力をすすめていたとすればイギリス革命は起こらなかつたであろうし、ホップズも『リヴァイアサン』と書く必要を感じなかつたかもしれない。しかし事実、革命は起り、血は流され、政治的古典は書かれたのであり、後世の者にとってはこの方が歴史の教訓となりうるので

ある。

『権利の請願』は成立したがチャールズはただちに議会を閉会し、一六二九—四〇年と十年以上にわたり国会を開かず無視しつづけた。王から支配権を奪いとらない限り制定された法も効力を發揮することのない紙片に過ぎなかつた。

#### 四 近代精神の創造

権力を相対性の天秤にかけて既存価値から解放して見せたマキャヴェリが、天才的な変り身の早さで変革期を生き延びたのにたいし、ホップズは権力を分析して原子化し、再び結合して全く異質の構造に転換してみせた点において、専制君主の恣意的な権力という鉛を人民の同意に支えられた権力という金にかえる統治の鍊金術の働きを提示した。ホップズのこの原始契約説は人民民主主義論の基本モデルであり、近代政治学への革新的作業であつた。

ホップズ（一五八八—一六七九）は田舎牧師の子として生まれ、伯父にひきとられて育つた。<sup>(10)</sup> オックスフォード大学に入ったがスコラ哲学の学風にうんざりし、アリストテレスへの拒否反応を起すほどになっていた。卒業後、三代目の若きキャヴェンディッシュ伯爵の養育掛りとして伯爵には添つて欧洲にわたり長期に滞在した。この間、一六二六年の伯爵の死までの二〇年間、伯爵とともに新しい時代思想を学び、共に学習をすすめた古典古代の名著（例えば晩年に公刊されたホメロスの作品など）の翻訳などを行ううちに次第に文筆活動を志すようになつた。彼が幾何学の方法に目を開かれたのもこの大陸滞在の時期においてであつた。

ホップズはフランシス・ベイコン（ジェイムズ一世のもとで大法官もつとめた文筆家一五六一—一六二六年）の助手を一時つとめたこともあるので、この経験論の始祖から方法論上の影響を全く受けなかつたとは言えない。しかし、科学的方法論の領域においてはベイコンがホップズに与えた影響力よりもホップズの晩年の時期において、死後のベイコンが王制復古以降のイギリスにおいて学術的に及ぼした影響力の方が大きいと言える。政治哲学上において、ホップズはジョン・ロックの先達であつたが、ロックが選んだ学的方法はベイコンの唱道した経験的方法であつた。

ホップズの用いた探究方法はベイコンとは対照的に位置する演繹的方法であつた。ホップズはこの方法をパリ滞在中に知り合つたメルセンヌ、ガッサンディ、デカルトなどフランスの学者から学びとつた。デカルトとは必ずしも友情を結び得なかつたが、二人の共通点はアリストテレス主義への訣別と数学を新しい哲学の方法とした点であつた。ホップズは唯物論者であり、その思想へは無神論的な傾きを示しており、政治理論に幾何学の論述方法を応用することに関心を示した。彼は宗教的心情を統治の方策に利用することを教えたが、自ら的心情を吐露することはなかつた。この点は類似の政治理念を有しながら心情的には告白癖のあつたジャン・ジャック・ルソーとは対照的である。

他方デカルトはガリレオに刺戟を受けて宇宙論を完成したものの、ガリレオが異端審問で厳しく訴追されたことを知つて公刊をとりやめた。デカルトは長い軍隊生活を送つたが「一度として戦つた様子もなく」（ド・サスイ）その生涯を放浪と瞑想的な孤独癖のうちに過した。その習癖を破り、スウェーデンの女王クリスチーネに早朝五時に伺候して哲学を進講する約束をし、それを実行しはじめて十日も経たぬ間に肺炎にかかつて死亡した。デカルトはイエズス会の学校の生徒であつた頃から死に至るまで保守的な宗教観と政治観の持ち主であったので、ホップズのもつ革新

的な思想傾向を嫌い、ホップズの論理学者としての能力は認めはしてもその人間觀は邪惡であると評して <sup>(13)</sup>いた。

デカルトとホップズが同時代人であったことから二人には多くの共通した思索の傾向が見られる。一人とも物質として身体をとらえる考え方を抱いていたから、どちらも人間機械論、つまり自働機械 <sup>オートマトン</sup>としての人間というとらえ方をしてきた。デカルトがここから物質と精神の二元論を導き出し、その結合点を模索して行く一方で、ホップズはこの自働機械としての人間を政治社会に転写し、国家を身体をもつた人格として位置づけようとした。デカルトは自らのコギトの論理が敬虔な聖アウグスチヌスの存在論を拒否する不遜な、それだけに異端的な論理であると気付いていた以上、カトリシズムへの従順さは外面向なものであつたとしても心情的には捨てきれなかつた。

しかしホップズにとってはローマ教会は国教会牧師であつた父親の警戒すべき敵であり、母親にとつてはスペインの艦隊の来寇をもたらした恐怖の源泉であつた。ホップズがローマ教会とアリストテレスぎらいであつたことと正反対に、デカルトはアリストテレスを「師父」の一人に数えるイエズス会の忠実な信徒として聖餐化體説 <sup>トランス・サブスタンシエイション</sup>（パンとぶどう酒が聖靈によりキリストの肉と血にかわる）を認めており、ホップズはそれを信じるふりをするデカルトは欺瞞的行為を行つていると見做していた。

一六四二年の長期議会でチャールズ一世の右腕であつたストラフォード伯の糾弾がはじまつたとき、ホップズは前の年に自家版として完成し、識者のあいだに回覧されて関心を惹いていた自著の『法の原理』 <sup>エレメンツ・オブ・ロー</sup>（一六四〇年）が国王擁護論と見做される可能性があり、そうなれば身に危険が及ぶと考えてパリに亡命した。<sup>(14)</sup>その後間もなく一六四二年匿名による国王擁護論『國家論——De Cive』が出版され、パリの読書界で著者が誰か、デカルトでないかと取り沙

汰されたとき、いち早くそれがホップズである」とを探りあてたのはデカルトであった。<sup>(15)</sup>

パリへの逃避行を行つたホップズの念願は何處にあつたのか。一五八八年スペインの無敵艦隊の来寇の報せに動顛した母が生み落した恐怖との双生児と自称するホップズは、自伝で告白したように、戦争や社会的動乱にたいして過敏ともいえる反応を示した。スペインが一五八八年以降も幾度かイギリス攻略を企てたことも、カトリック勢力にたいする彼の疑心暗鬼を深める原因ともなつた。こうしたことがホップズを戦争と平和、法と秩序、政治権力と自由など、政治学の根本問題にたいする全面的な再検討をさせ、遂には畢生の大作『リヴァイアサン』を完成させることになる。

(1) 東南アジアにおいても乱開発の進んだタイ、ベトナム、ミャンマーなどは国土の大半を覆つっていた森林は、二〇〇〇年たらずの短期間にほとんど姿を消した。ミャンマーのタイ国境に面したシャン地方はかつては密林であったが大規模の乱伐により赤土の露出した山塊の連続となつて井戸も川も涸れ住民は絶望的な水不足に悩んでゐる。カンボジアの熱帯林もタイとベトナムの両国から侵入した軍隊と業者のために殆んど消滅した。ゲリラの支配する山岳部付近にわずか残つてゐる樹海も消滅の危険にさらされている。インドネシア、マレーシアは「企業努力」によつて計画的伐採方式による開発に踏み切つた。いわゆる人跡未踏の原始林というのは二〇年前には存在したが、今は東南アジアから消失した。中東その他については下記のブックレットを参照。安田喜憲『森と文明—環境考古学の視点』一九九四年。

(2) 『ディスクルシ』の「の点の指摘につづけた Leo Strauss & Joseph Cropsey (Ed.) *History of Political Philosophy* (Chicago, 1963) のレオ・ショトラウスのマキヴェリ論が注目されてよい。

(3) マキヤヴェリ小伝については、プレイヤード版のマキヤヴェリ全集—*Machiavel, Oeuvres Complètes*, NRF, 1952 のほか、J.R. Hale, *Machiavelli and Renaissance Italy* (Penguin Bks, 1972) を参考。レオナルドの描いたアンギアリの戦いの壁

画は現存していない。その犠牲者の正確な数も不明。マキャヴェリの上司で歴史家のグイッチャルディーニが『イタリア史』の中で述べている「「来た、見た、逃げた」と評された国民軍の敗走のいわゆつは塩野七生『わが友マキャヴェリ』（中公文庫、一九九二年）で紹介されている。

- (4) 田中美和太郎「ソクラテスとプラトン」（世界の名著『プラトンI』の解説、一九六六年）
- (5) エラスムス『痴愚神禮讚』渡辺一夫訳（岩波文庫、一九五四年）第六六章。
- (6) カール・カウツキー『トマス・モアとユートピア』（一八八七年）渡辺義晴訳、法政大学出版局（一九七五年）第二篇第四章、引用部分は多少訳文を省略してある。
- (7) カウツキー前掲書二一〇頁。
- (8) モアがカトリック教徒であつたことを特に強調しても意味はない。当時はヘンリー八世を含め国民はその殆んどがローマ・カトリック信者であった。モアが処刑されたころ英國教会が設立されたのであった。勿論、カトリックの信徒のあいだにあっても様々な修道会があり微妙な信仰生活上の態度の違いは見られる。トマス・モアの処刑の段階ではヘンリー八世はローマ教皇により破門されており、その王に護教のために処刑されたモアは殉教死を遂げたのであった。——しかし、モアは死後三〇〇年たってはじめて聖列に加えられている。一三世紀英國カンタベリ大司教トマス・ベケットがヘンリー一世の臣下に殺害された直後聖人に列せられたことと比べるとローマ教会の政治力の衰えが歴然と読みとれる。
- (9) 「人権宣言集」高木八尺、末延三次、宮沢俊義論（岩波文庫、一九五七年）の権利請願の解説文。
- (10) ホップズの生涯の年譜は水田洋、田中浩訳のホップズ『リヴァイアサン』（河出書房新社、一九七四年）にあり、解説も参考にした。その他ペンギン叢書の『リヴァイアサン』のC.B. MacPhersonによる解説も参考になる。Richard Peters, HOBBS, (Penguin Bks, 1956) は啓発的であり、D.D. Raphael, HOBBS, Moral and Politics (George Allen & Unwin, 1977) には教えられぬといふのが多い。ホップズ伝の傑作は勿論、オーブリの『名士小伝』橋口稔・小池鉢訳（富山房百科文庫、一九七九年）である。
- (11) クリストファー・ヒル『イギリス革命の思想的先駆者たち』福田良子訳（岩波書店、一九七一年）はこのペイコーンの復活を

強調した研究書である。

- (12) ド・サスイ『デカルト』三宅徳嘉、小松元訳（人文書院、一九六一年）三一頁。つまり、デカルトは軍隊生活の退屈さと単調な生活を通じて哲学的思索に導かれたのである。

(13) ライナー・シュペヒト『デカルト』中島盛夫訳（理想社、一九六九年）六一頁。

(14) オーブリはホップズ伝において、当議会が開会中で国王の特権に激しく反対していたとき、マナリング主教がホップズの持論を説いて国王を弁護し、その廉でロンドン塔に送られた。そこでホップズは保身のためフランスに去ってパリに居をかまえた、と書いている。前掲書一〇四頁。

(15) ライナー・シュペヒト前掲書、六〇頁。